



ながもと けんじ  
永本 賢二 さん

1959年9月1日生まれ

1970年に水俣病と認定される。

胎児性水俣病患者。

(社福) さかえの杜 小規模通所授産施設「ほっとはうす」に勤務。

水俣病患者や障害者の苦労を理解してもらい、明るいまちづくりが進むことを願って、自らの体験を語る。

2002年1月から水俣病資料館の「語り部」となる。

水俣市明神町在住。

僕はチッソの専用港がある梅戸で生まれました。1959年当時、祖母と両親、姉二人の6人家族で暮らしていました。家が海の近くで、船がありましたので、お父さんはチッソ工場に働きながら漁業もして、家族でよく魚を食べていました。

僕が生まれたとき、長男ということで家族はみんな喜んだそうです。しかし、小さい頃僕は泣いてばかりいたようで、首がすわるのも遅く、歩くことができるようになったのも4歳になってからでした。心配した母はよく僕をおぶって病院にいきましたが、母の背中で母の髪をひっぱりながら「病院は嫌だ」と泣いたのを憶えています。そして幼い頃に胎児性水俣病と診断されたそうです。

僕は、水俣病であること、また、体が不自由なことでいろいろな差別を受け、つらい思いをしてきました。原因企業であるチッソ工場のことをうらんだこともありますが、僕自身のお父さんもチッソ工場に勤めていたし、今も水俣にはチッソ工場働く親を持つ子どもたちがたくさんいます。僕はそんな子どもたちが胸をはれるよう、チッソ工場はこれから二度と公害を起こさないようにして頑張ってもらいたいと思っています。

僕が水俣病の語り部になったのは、今後、僕達のようなつらい思いをする被害者がでないよう水俣病の悲惨さを伝えることが一つの目的ですが、その他に水俣病患者を含めた障害者達の思いを伝え、少しでも障害者に対する差別・偏見をなくせたらと思ったからです。

僕は、皆さんにもっと障害者と交流してほしい、車椅子の人をみたら車椅子を押しあげたり、目の不自由な人がいたら、手を差し伸べてほしい、と思っています。そんな優しい気持ち、思いやりを大事にしてほしいです。

【写真；自宅の縁側にて】